

令和2年度第1回長浜市総合教育会議要点録

I 日 時 令和2年7月2日（木曜日）13時30分～14時50分

II 場 所 長浜市役所 本庁舎3階 特別会議室

III 出席者

【構 成 員】藤井勇治市長、板山英信教育長、
西橋義仁教育委員、美濃部俊裕教育委員、
宮本麻里教育委員、中村亜紀教育委員

【事 務 局】酒井教育部長、清水教育委員会事務局次長、
鵜飼教育委員会事務局次長、武石教育改革推進室長、
伊藤教育指導課長、今井教育総務課長代理、成田教育指導課長代理、
且本総合政策部長、横尾総合政策部次長、柴田総合政策課長代理
他、担当職員（2名）

【議事進行】且本総合政策部長

【傍 聴 者】無し

【報道機関】無し

IV 欠席者 廣田光前教育委員

V 内 容

1 開 会

2 市長挨拶

（要旨）

- ・第1回長浜市総合教育会議の開催にあたりまして、一言ご挨拶申し上げます。教育委員の皆様におかれましては、日ごろから子どもたちの教育の充実と発展、そして健全育成のために大変なご尽力を賜っておりますこと、心から感謝申し上げます。
- ・さて、本日の会議では協議と意見交換を行います。まず、協議事項の長浜市教育大綱では、本市の教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策の大綱として、その目標や施策の根本となる方針を策定します。昨年度から総合教育会議にて策定に向けての考え方や、方向性について説明してまいりましたが、今回、その素案について事務局から説明します。皆様からのご質問、ご意見などいただけましたら幸いです。

- ・次に、意見交換のテーマは「新型コロナウイルス感染症対応の中での、本市の学校での取り組みについて」です。
- ・新型コロナウイルス感染症は、この半年間で一気に世界中に広がり、国も特別措置法を作り、緊急事態宣言で外出を控える、マスクを着用するなど、我々も体験したことないことが続いて参りました。現在は皆様のご協力のお陰で緊急事態宣言も解除され、少し落ち着いたという状況です。
長浜市も、新型コロナウイルス感染症対策に全力で取り組んでおり、対策本部を立ち上げて今日まで臨んでまいりました。現在は、引き続きの感染防止と、地域や自治会の活動、経済活動を再開させるため、両立していくという新たな局面に入っており、行政としてしっかりと取り組んでいきたいと思っております。
- ・また、学校教育の現場でも、2月27日に過去にない全国一斉休校となり、大変な心配と混乱が続きました。それが解除された4月には待望の入学式を挙行し、子どもたちの笑顔が戻りましたが、入学式後に新たな事態が発生し、翌日から再度休校するという、異例の事態が起きました。
再びの休校は、子どもたちの元気な顔を見た直後であっただけに、まさに苦渋の決断でしたが、子どもたちの健康と命を守るために出した決断となりました。
- ・行政として全力を挙げて対策を一つ一つ進めておりますが、国も県も市も手探り状態が続いているのも事実です。
今回の出来事は、子どもたちにとっても忘れることのない大きな事態です。その中で、子どもたち自身もどうすれば感染防止ができるのか考え、学び、これから長い人生に必ずや役立つ経験にしてほしいと思っております。
- ・今後も、第二波、第三波が来るとの予測もある中で、覚悟が必要です。その中で、コロナと共に暮らし、共に学ぶという新しい生活様式を編み出し、全員で協力して必ず乗り越えていくということが一番大事だと思っております。
- ・また、学校給食がスタートし、私も給食の時間に教室に行きました。学校の先生方や教育委員会も感染防止のための工夫や努力をしていただいて、子どもたちも大変笑顔で給食を食べていました。「美味しい」という言葉を聞き、子どもたちの嬉しい顔を見ることができました。徐々に楽しい学校生活が戻ってきていると感じております。
- ・学校再開後、子どもたちにどのような変化があっただけに見えてきたものは何か。事務局から説明させていただいたあと、今回の出来事を通して、今後、子どもたちの教育にどのようなものが必要かについて、ご意見・ご議論を賜りたいと思います。
- ・教育委員のみなさまと行政が今後の長浜市の教育のあり方について活発な意見交換

を行い、子どもたちを育む環境について、より良い方向性を見出すことができることを心から期待してご挨拶とさせていただきます。本日は、よろしくお願いいたします。

3 議事

(1) 協議事項

① 長浜市教育大綱（案）について

事務局は配布資料に基づき、長浜市教育大綱（案）について説明を行った。その後、各構成員から意見は出なかった。

4 意見交換

テーマ：「新型コロナウイルス感染症対応の中での学校の取り組みについて」

(1) 行政説明

3か月の臨時休業後の子ども達の姿について事務局（教育指導課）から説明。

(2) 意見交換

〈意見：教育委員〉

教育現場の中で、新型コロナウイルス感染症がもたらした一番の問題は、コミュニケーションが奪われてしまったことであると思っております。マスクや三密を避けることでその機会が奪われ、制限されています。私は現職のころから、コミュニケーション能力を高めることを重視してきました。この能力は、自分の考えを述べるだけでなく、他の人の考えを聞いて、自分の思いを相手に伝える非常に大切な能力です。

また、教師にとって子どもの表情を見ることはとても重要で、子どもがどのような表情で話しているのか、どのような表情で話を聞いているのかがマスク着用によって分からなくなることは非常に問題があります。

ここ数年、長浜市では授業にアクティブラーニングの手法を取り入れるために動いておりますが、マスク着用や三密を避けるなどのコロナ対策により、アクティブラーニング授業ができない状態になるのではないかと心配をしております。それに代わるオンライン授業が盛んに叫ばれており、知識や技能を伝達するには良いかもしれませんが、それだけでは学べないもの、失ってしまうものもあると思っております。

また、今年の7月、8月は、学校生活で非常に大事な時期であると考えております。子どもたちは、6月当初に学校が始まって、友達に会えることを楽しみに意気込んでいました。しかし、学校が再開されて1か月以上が過ぎ、今から疲れが出てきます。特に

小学1年生は、今までにない生活様式と初めての経験ばかりの中、かなりストレスが溜まっているのではないかと心配しております。また、例年、連休明けは不登校になりやすく、問題行動を起こしやすい傾向があります。今年は、この7月、8月に、そのような傾向になるのではと思っております。

しかも今年は、6月から12月の7か月間を2週間の夏休みだけで乗り切るという生活を余儀なくされます。これは、子どもたちにとってかなり負担になるのではないのでしょうか。

その中で、1つの提案ですが、スライドにあるように、遅れた授業を行うことも大切ですが、今は学力向上よりも、子どもの気持ちを掘り起こし、気持ちを表現させ、先生がそれを受け止めて子どもの気持ちを理解していくという、コミュニケーションをとることに全力を挙げることも必要だと思います。子どもたちに、「学校は先生に何でも聞いてもらえる場所」「先生と話す则自分の思いが伝わる」と感じてもらえる状況を作ることがとても重要であります。

例年も、子どもたちは4か月間ある2学期の中、12月になると疲れてきます。それが今年は7か月もあるので、子どもは耐えられるのか、うまく大人が引っ張っていけるのか、という心配をしております。

この7月、8月は子どもたちの生活の中で非常に大切な月になります。コミュニケーションをとることに力点を置いた教育を、各学校で進めていただけるとありがたいと思います。

〈回答：事務局〉

ご指摘の通り、マスクで表情が見えない、コミュニケーションが取りにくい、というのは教師や子どもにとって非常に心配な点です。しかし、感染予防としては避けられず、新しい生活様式の1つとして制限された中で、どのようにコミュニケーションをとっていくかが今後の課題になると考えており、配慮して対応していきたいと思っております。

また、不登校の心配や、子どもだけではなく、教師にも疲れが出てくる点については、例年以上に注視して、対応してほしいと（学校側に）お願いしています。

〈意見：教育委員〉

私は、本日、自分の住む地域の集団登校の引率ボランティアの依頼があったため、学校まで子どもたちと一緒に歩きました。そこで、子どもたちの様子を間近で見ましたが、熱が出て休みの子が数人おり、人数が少なく感じました。勝手な推測ですが、疲れが出てきているのではないかと思います。

先ほど説明がありましたが、最近では欠席者が少なく、不登校の子が登校できたり、みんなが外で元気に遊んでいるということを知って、良かったと思っております。世の中の生活が変わってきており、ほっこりしたという親が多いと聞いております。

また、子どもたちと登校する中で、先生方が通学路に立ってくださっていました。毎日立ってくださっているそうです。先生方は、次々と変化したり、追加される対応に追われ、

私たちが外から見ているよりもご苦労が多いと思います。やはり子ども、親、先生みんなのストレスが増えていく中で、前向きに生活を進めていく一方、引き続き一人一人がどのような状況かをきっちり把握できるよう、注視しながら生活していく必要があります。

そんな中、先生方は、このコロナの対応の中から学ぶことも非常に大きいです。子どもたちも、今の生活から何かを得ることはできるので、誰もが今、逆境から得られることを見つけて、成長していけるといいと思いました。

また、手伝えることは手伝わないといけないなと思いました。先生方は、毎日の消毒や、様々な準備や後片付けなど本当に大変だと思います。各校で「〇〇を手伝ってほしい」とは言いにくいと思いますので、ぜひ教育委員会や市長、管理職の先生から、学校の協議会やボランティア団体、地域に手伝って欲しいという声かけをしてもらえると、支援の動きが出てくるのではないかと思います。

その中で、感染症の特徴から、手伝いを依頼する側も受ける側にも不安があることは事実です。しかし、地域全体で子どもたち、保護者、先生方を支えていく空気を醸成していくことが私たちにできることかと思えます。

学校だけではなく、地域においても様々なことが無くなってきていますが、新しい生活様式の下、少しずつ、今までしてきたこと、築いてきたものを戻していくことが大事かと思っております。

〈回答：事務局（教育指導課）〉

少しでも先生方の業務の手助けになるように、スクールサポートスタッフとして、消毒作業やプリント印刷等、先生と子どもたちが向き合う時間を確保するための手助けを、補正予算を組みながら考えております。

地域の方々の手助けについては、呼びかけたいが来てもらっていいのかという学校側の悩みと、行っていいのかという地域側からの悩みが両方から出ています。

〈意見：教育委員〉

学校が始まってからも給食が無い期間を2週間とって下さったので、他の市町に比べると、子どもたちがゆっくり学校に慣れていくことができ、とても良かったのではと思います。

学校では、新しい生活様式に沿った取り組みをいろいろとされていますが、保護者にはどのような対策をしているかがあまり伝わっておらず、「学校ではどのような感じで対策されているんだろう」という声を耳にします。もちろん、ホームページへの掲載や、フェイスブック等で発信はありますが、私のように登録して気にして見ている一部の人にしか伝わっていないように感じます。

ホームページは、自分から見に行かなくては情報が得られないため、今回に限らず、発信したことをみんなが見る手段を考えなければ、なかなか保護者まで届きません。例えば、メール配信やプリントは情報が入りやすいので、フェイスブック等の登録が周知

されるまでは、様々なツールを活用しないと情報の一方通行になってしまい、情報を発信して満足しがちになると思います。子どもたちのことを考えて様々な対策をいただいているので、何とかしてその取り組みを保護者に伝えられたらと思っています。それらを、先生の負担にならないように考えていくことも必要です。

また、子どもたちは様々な行事が中止になり、モチベーションが凄く下がっています。その中で保護者の方が、子どもにどのように声を掛けていいかわからないという声があります。この状況は誰もが初めてのことで、保護者も同じように悩んでいます。正解はないと思いますが、どのように声をかけるかのヒントになるような情報発信があると少しは救われると思います。

また、3か月の休校で、子ども自身が自分であることを見つけていく難しさを実感しました。その中で、先生が「〇時～〇時は算数の〇ページをする」などが細かく書いた時間割を作ってくださったり、本当に様々なことをしてもらって、学びながら楽しく過ごすことができました。一方、全てが与えられた状態で進んでいったので、今後は「生きる力や主体性」という頻繁に耳にする言葉も、単語だけをいうのではなく、それを身につけるためにどうすればいいかを具体的に考えていく時期に来ているのではないかと思います。

〈意見：教育長〉

私の現役時代から「生きる力を養う」「人権教育」という言葉や、最近では「アクティブラーニング」等の言葉がありますが、これらの言葉はどれも仕組みられた、自己満足的なものになっているのではという視点に立った反省が必要であると思っています。

コミュニケーションの話が先ほどありましたが、子どもたちは今までコミュニケーションを本当にしっかりしてきたのか。自分が傷つかない、自分を傷つけない範囲内でのコミュニケーションをやらせてきたのではないかと思います。

コロナの影響で、特に保護者世代に、今まで行ってきかたはずの人権教育の脆さが出ました。例えば、身近なところで感染者がでたときの反応や、噂ですぐにトイレトペーパーが無くなるなど。これらが実際にあったからこそ、新しい学習指導要領で何ができるかをもっと真剣に考えていかねば、自ら進んで学ぶ力とは程遠い世界になるのではないかと思います。

また、疲れの話がありましたが、子どもも親も先生もみんなが疲れています。中でも先生はSNSを通じて「〇〇学校はこれをしている」「〇〇学校は何もしていない」といった、必要以上の情報を得てしまい、その結果「何かしなくては」と取り組み、子どもたちに全てが与えられた生活をさせてしまったのではないのでしょうか。

比較対象が悪いかもしれませんが、東日本大震災の時は、全てを手伝い、お膳立てする人が周りにいませんでした。そのため、それを経験した子どもたちは、ある意味で様々な力が付いているのではないかと思います。

〈意見：教育委員〉

今年初めて幼稚園に入園した3歳のお子さんがおられるご家族によると、マスクをしているとコミュニケーションがとりにくく、友達の名前が覚えられないと仰っていました。

小学生のお子さんを持つご家族は、先生が細かく気を使って本当に良くしてくださったと感謝されていました。

学校の先生はすごくいろんなことをしてくださっていますが、学校のプリントなどを保護者が17時までに取りに行かなくてはならないようで、勤務形態に変化が無く、今まで通り働いておられる親御さんはその時間までに学校にいけない、取りに行くのが大変と仰っていました。

また、「生きる力」というお話がありました。自尊心のような、これは自分にはできるというものがあると良いと思います。

私は、同窓会が頻繁にあるので、中学の同級生にもよく会います。当時はいろいろな子がいて、例えば当時成績が良くなかった子もいましたが、今では専門職で働いていたり、それぞれが自分のできることで、当時の学力に関係なく、いきいきと暮らしています。学力をつけるのも大事ですが、技術を身につけるなど、「これはできる」「これをして生きていける」というものがあれば良いと思いました。

今は塾に行つて、良い高校、大学、会社に行くことがある程度、安易な道ですが、何かできることを見つけて、何かがあっても強く、心身ともにたくましく生きていけるように育てていくことが大切であると思いました。

〈意見：市長〉

皆さんのご意見、ありがとうございました。

やっと学校に子どもたちが来てくれて、やはり学校現場の主役は子どもであり、大人が驚くくらい、子どもから学べることがあると思っております。

今後、経済の成長や豊かな暮らしだけではなく、「心の豊かな暮らし」が大切で、価値があるように変わってくると思います。したがって、新しい生活様式という大きなくりのなかでも、心の豊かさを尊重していくことに、重きが置かれていくのではないのでしょうか。

このコロナの対応は、誰もが初めてで、こうあるべきという方針がありません。学校に行かない毎日、給食の無い学校、感染しないためにどうすればいいかなど、子どもたちは子どもたちなりに今の環境の中、一生懸命過ごしてくれています。大人も子どもと一緒にあって、心の豊かな毎日の暮らし、心の豊かさが尊重される社会の仕組みを作っていく新しい時代が来たと思っております。

〈終わりに：教育長〉

今日、市内の中学校を訪問し、非常に印象に残った掲示物がありました。それは「大好きだから くつつかないよ」という言葉で、今だからこそ学べることだと思えました。

子どもたちの中には、「どうせまた中止や」「どうせ大人が決めるんや」という意見が

あるそうです。このようになってしまうと、どんどんマイナスの効果になります。

子どもも先生も、疲れたら休めばいい、無理をしなくていい。数学に疲れたら今日はグラウンドでサッカーしようというくらいのゆとりで接する。一度無くした意欲を取り戻すのは簡単なことではない。これらのことに力を入れて、当面の夏を乗り切っていきたいと思います。

14時50分 閉会